

「児童文学と時間」ノート

篠 三 知 雄

I

わたしたち現代人は、時間に束縛され、時間に追われて、生活している。会社も、学校も、決められた時間に始まり、そして、終る。家庭にあっても、主婦は、夫や子どもを、決められた時間に送り出し、日中はテレビの番組や稽古事の時間に合わせて行動している。このように、時間に支配されている生活では、時間を厳守することは美德であり、時間を遅えることは他人の時間を盗むことで、悪徳の一つにさえなる。始業時に、たとえ、1分遅れても、タイムレコーダーは遅刻を記録し、その人に遅刻の常習者の刻印を押してしまい、その人の信頼度は極端に薄らいでしまう。

このような状況になったのは、特に産業革命以後、資産なき者は時間単位で労働力を売り、資産ある者がそれを買うことにより、生活する方法が著るしくなってから急激に進み、時計という機械文明の利器が精巧になるにつれて、いっそう押し進められたといえる。そして、今や、分秒の単位を越えて、十分の一秒、百分の一秒がスポーツの記録などを通じて日常化しつつある。

人間は、この地上に存在するようになって以来、長い年月をかけて「時間」を発見した、むしろ、発明した。昼夜の区別による1日の観念、月の満ち欠けによる歴月の観念、生物の成長や農作物の収穫による季節の観念は、さまざまな形に変化発展した。昼夜をそれぞれ12に分ける考えは、すでに古代エジプトで行われていたという。

しかし、当時、ナイル川の定期的氾濫による農業を行い、ミイラに蘇生の夢を託した事実などから、時間は円環的な観念であったと考えられる。インドの輪廻思想にしても円環回帰の時間観念が支配していたことは間違いない。

現在は、一回性の歴史観の定着により、時間の直進的観念はむしろ普通である。ヨーロッパの終末思想は、人間が最後の審判を受けるという意味で、直進的時間の観念が背後にあり、一方、わが国の末法思想には必ずしも人類の破滅を意味せず、むしろ、反省と仏の再来を期待する意味で、円環的時間の観念があるのは興味あることである。しかし、そのわが国も、今は直進的時間の観念が支配的であることは確かである。

そうした時間に支配されている生活の中では、人間はそこから脱がれ、また、反抗したい気持ちになり、支配する力が強ければ強いほど、そして、その力から現実に脱がれられな

いとすれば、別の面で時間を越えた世界への憧れが強くなる。即ち、現実の物理的な時間の支配に対して、観念的で、主観的な人間的時間への関心が強まる。そして、その人間的時間は宗教や芸術に求められている。特に、芸術は空想を望むままにできるという意味でその要求に応えている。なかでも、時間の芸術といわれる音楽、舞踊、演劇、そして、文学もその要求に応えるものの一つである。

文学はそもそもの始めから時間とかかわりがあるばかりでなく、文学には固有の時間原理が存在する¹⁾。文学の中の時間は現実の時間から切り離された「虚構の体験の時間」である。数時間で読了できる作品に数十年の体験を盛り込むこともできれば、ほんの一瞬の経験を数時間どころか何日も読むのに要する場合もある。また、実人生には、始めも終わりもないが、文学作品にはなんらかの始まりと終わりがある。また、時間が現在から過去にさかのぼる場合もある。それは現実とは別の面において展開する時間であり、再生された時間である。文学は単に現実の時間から逃がれたい願望に応えるだけではなく、人間が時間に対して抱いている考えをすべて示すことのできる場でもある。

同じことが、同じ文学の一形式である児童文学についてもいえるであろう。この文では時間が児童文学とどんな関係にあるか見たいと思うのだが、児童文学の明確な境界線があるわけではないので、「児童が読むであろうと思われるもの」という程度の広い範囲としたい。しかし、そうした広範囲のものを、同時に扱うわけにはいかないので、さしあたりは気まぐれで、行きあたりの的なもので満足せねばなるまい。

II

まず、神話類について、少し触れたい。神話類は、もちろん、児童文学ではないし、決った形があるわけではないのだが、再話の形で児童に小さい時より親しまれる。創世神話だけでも、各民族・部族が、それぞれ幾つか持っている。ある本は95の創世神話を紹介しているが²⁾、もちろん、これに尽きるものではない。また、時代の経過、場所の変化による変形も複雑であろう。こうした点を解明することは今後の宿題である。とりあえず、ギリシャ神話から入ることにする。

ヘシオドスの『神統記』によれば、創世はまず、カオスが生じたという。この時点ではまだ時間は存在しない。しかし、ガイア（大地）が生れ、大地の奥底であるタルタロスが生れ、美しいエロスが生まれた。そして、ガイアは、カオスから、ウラノス（天）を生じさせた。そして、天と大地は多くの子を生み、その中にはクロノスがいて、クロノスは巨大な力を持つ父を憎み、倒した。こうした、大地や天の誕生は、ある時間的要素を示唆してはいるが、まだ明確な地上的時間観念はない。いわば、「永遠的時間」の中で生まれている³⁾。

ところで、クロノスは、大地が生んだ子をそのつど食べてしまい、大地を悩ました。こっそりと隠されて生まれたゼウスは、またたく間に成長したという。ここには、幼児状態から成人状態に向って一定期間継続する連続的・漸次的成育が見られる。また、タイターンに対する神々の戦いの場面には、「10年」もの間、小休止さえなしに戦ったとあり、地上時間の観念が生じている。また、古い神、新しい神といった時間経過の前後観念が持ちこまれている。

旧約聖書の創世紀によれば、つぎのようである。

In the beginning God created the heaven and the earth. And the earth was without form, and void; and darkness was upon the face of the deep. And the Spirit of God moved upon the face of the waters.⁴⁾

これは、ほぼギリシヤ神話にある「カオス」に近い。つぎに神は 'Let there be light' といって光を生じさせ、それを昼と呼び、暗を夜と呼んで、第1日目の仕事を終えている。そして、4日目には、天体の存在を指示した。

And God said, Let there be lights in the firmament of the heaven to divide the day from the night; and let them be for signs, and for seasons, and for days, and years: and let them be for lights in the firmament of the heaven to give light upon the earth; and it was so. And God made two great lights; the greater light to rule the day, and the lesser light to rule the night; he made the stars also.⁵⁾

その天体によって、1日の観念ばかりでなく季節、年の観念の基準とすることを命じているのである。また、6日間で神はすべての仕事を終り、第7日目を安息日とすることを命じていることは、すでに週の観念も持っていたことを示している。このように、聖書の世界にあっては、第4日にして歴日、歴週、歴年の観念は確立したのであり、これには驚ろかされるのであるが、考えてみれば、そもそも神話とは、その民族なり部族なりが、かなり文化的に進んで、過去をふり返った結果生じた産物であるから、当初より時間観念が出て不思議はないのである。

また、神は、人間の祖先であるアダムを慰めるために、イヴを作ったのであるが、彼女は蛇に禁断の樹の実を食べるようにそそのかされ、知恵の樹の実を食べてしまった。それで神は不死の樹の実をも食べられることを恐れて、アダムとイヴの二人を楽園から追放したのである⁶⁾。不死の観念は、同時に、生の限界、時間の限界の観念である。このアダムは930才まで生きた。

大洪水に見舞われたノアの話も、時間的観念の色濃いものである。雨は40昼夜降り続き、洪水は40日間あり、150日間水は引かなかった。7月17日にアララト山頂に箱舟はひっきり、10月1日になって山々の姿が見え、翌年の1月に地が見え、2月27日になって、やっ

と箱舟から地上に出たられた⁷⁾。そして、このノアはその後、350年生きて、950才まで生きたという。聖書の初期の始祖はいずれも数百年の長命である。祖先に対する尊敬と長命への願望の表明であろう。

また、ヨシュアがギベオンの町を攻めた時、神はヨシュアの願いを聞き入れて、太陽をまる1日ギベオンの上にとどまらせた⁸⁾。これは、時間の自在の伸縮である。しかし、これはあくまでも奇蹟の1つであり、聖書全体を支配している時間に対する観念はあくまでも天体の運行にもとづいた物理的時間であるといえる。

日本の創世神話、イザナキ・イザナミの神話は、その名前は潮の干満もしくは波の動きを連想させるが、時間的観念は乏しいといえる。死の観念も希薄で、イザナミは死んでも、その住む場所を「根の国」に移すだけで、本質的に死んではない。

妻を求めて、根の国へ行ったイザナキは、身の穢れを落すため、体を洗ったとき、多くの子を生み、最後に、アマテラスオオミカミ、ツクヨミノミコト、スサノオノミコトを生んでいる。伝える記述により多少の相違はあるが、ここに太陽と月の神が誕生し、昼と夜の観念が生れたことが示唆されている。また、ある時、アマテラスオオミカミとツクヨミノミコトが喧嘩して、1日離れて住んだことがあるという。明確な時の観念ではないが、昼夜の区別意識は生じている。しかし、聖書などの記述された年代からすれば、ずっと後にできたと思われるにもかかわらず、日本の神話は時間観念が乏しいことは事実である。夜の天体についての認識も乏しく、星の神はアマツミカボシがいるだけだという⁹⁾。この当時、もちろん、農耕が行われていたはずであり、生活の基礎はそこにあったと思うが、そうした観念が神話にあまり出て来ないのは、神話を形づくった人たちが、そうした生活とは離れた世界にいたということなのであろうか。そうした世界では、時間の観念を必要としない、また、発達しない世界だったのだろうか。

中国の古い神話では、盤古という巨人が、混沌とした鶏の卵の中に閉じこめられていたが、大きくなるにつれ天と地がしだいに引き離され、1日1丈づつ背丈が伸びて、18000年たって現在のようなになったという話がある¹⁰⁾。これは日本の神話と比べると数字に対する観念が強いといえる。

死の起源について語っている神話はいろいろあるが、死について語ることは、先に少し述べたが、生への観念、時間的観念の表れに他ならない。

ニューブリテン島のバイニング族の神話によると、昔、太陽がすべての被造物を召集し不死を与えたが、人間は来なかったので、死すべきものとされたという¹¹⁾。

エチオピアのダラツサ族の神話では、昔、人間は年をとったら、神が若返らせてくれたが、火をほしいと思いつき、火を引換えに不死を返したという¹²⁾。

南アフリカのズールー族の神話では、人間のところへ天地の主である偉大な精霊が、カメレオンとサラマンダー（火とかげ）を使者として送り、前者には「永遠に生きよ」とい

い、後者には「死ななければならぬ」といった。カメレオンは、途中で虫などをとって食べていたので、火とかがけが早く着いてしまい、人間は死すべきものになったという¹³⁾。

マダガスカル島のタナラ族の神話では、神が試みに人間を殺したらどうなるか見たいと思って実行したところ、人間は泣きはしたものの、すぐ歌ったり踊ったりしはじめたので、生き返らせるためにとっておいた塵を捨ててしまったという¹⁴⁾。

メキシコの古代アステカでは、時間を日で区切り、20日間の18倍、つまり360日を1年としたり、ある巨人族が支配したのは52年の13倍の間支配したとか、ある者は52年の6倍の312年間太陽であったとか、神々の誕生から2628年経った時、雨が激しく降り、天そのものが降ってきたなどと、数の点で極めて敏感であることを示している¹⁵⁾。天体を丹念に観察することにより、国の将来を占い、ヨーロッパ人の出現と自国の滅亡を予測し、その侵略を許してしまったともいわれている。

民族により時に対する関心の差はあるとしても、神話はすでに文化の進んだ時代の産物であるから、原則は天体の運行をもとにした物理的な時間の支配下にあるといえる。仏教思想には、年(12カ月)、月(30昼夜)、昼夜(30須臾)、須臾(30臘縛)(=48分)、臘縛(60怛刹那)(=1分36秒)、怛刹那(120刹那)(= $\frac{8}{5}$ 秒)、刹那(= $\frac{1}{75}$ 秒)¹⁶⁾という現代の精密時計に匹敵する細分された単位まであるのは驚く他はない。

III

児童の読みものと時間との関係で、すぐ頭に浮ぶのは浦島太郎の話とリップ・ヴァン・ウィンクル、そして、眠れる森の美女の話であろう。浦島太郎の話は直接には眠りや夢には関係ないのであるが、竜宮での生活はまさに「夢」のようであり、眠りに等しいといえる。

「浦島太郎」の話は伝説であるから、時代により、場所により、さまざまな形をとり、どれが本当というものはない。古い記録としては『日本書記』、『万葉集』、『丹後風土記』にある。浦島太郎となったのは、中世の「御伽草子」以後、庶民に親しみやすくするために、「太郎」の呼称が使われたという。平安時代には「浦嶋子」で、古代では「浦嶋子(うらのしまこ)」で、個人名というよりは、役職名で、浦を取締る長者、もしくは、村君の意味であったという¹⁷⁾。

古い記録にも、いろいろ差違があって、一番古い『丹後風土記』によると、浦嶋子は神女とめぐり合い、海上の遠い島の宮殿で3年を過す。仙都で過した3年は、現世の300余年になっていたという。そして、別れに際して、嶋子との再会を約束する玉匣(たまぐしげ)を渡したが、禁忌を破って開けてしまったため、再会が果せず、歌の問答をして心を慰めるしかなかったという。

高橋連虫麿の作とされる『万葉集』にある浦嶋子伝説は、舞台は丹後の国ではなく、摂津の国になっている。嶋子と神女は言葉をかけ合い、合意の上で婚因したという。そして、船によって海上を渡ったという。二人が過したのは3年ほどと考えたのだが、人間界ではかなりの年月が過ぎ、家も垣根もなくなっていたという。また、玉篋は、開けることにより家がもとどおりになるのではないかと思い、自分から禁忌を犯し、自分の犯ちに気づき、あわてさわいで気絶し、しわだらけの老人となって死んだという。ここには、作者の意向が色濃く盛り込まれ、不老長寿の国に入りながら、それを捨ててしまった愚かさへの批判がある。『日本書記』では、海上ではなく、海中に入り、蓬萊山（とこよのくに）へ行ったとしているという。

いずれにせよ、これは、神婚伝説を基本とする他界淹留伝説、他界絶縁伝説が合わさったものと解釈されてよさそうである。これと類似のものに、漁撈民と狩猟民との抗争を示しているとされている「海幸山幸」の神話がある。これは南九州の漁撈民の間で伝えられてきたものらしい。類似のものとして、沖縄に、稲作根岳（オンサネダケ）伝説があり、その中では、御殿で過した一日が20年にあたるという。具体的な内容はだいぶ違うが、この種のものは、台湾、そして、インドネシアの方面にもあり、南方起源のものと考えられるという。中国その他の山岳民族においては、海の代りに山や森になっているという。

リップ・ヴァン・ウィンクルは、アメリカ初期の作家、ワシントン・アーヴィングが書いた『スケッチ・ブック』の中的一篇である。ジョージ三世時代のニュー・アムステルダムに住人であり、お人好しで、のん気者のリップ・ヴァン・ウィンクルは、細君の恐ろしい小言を避けて、鉄砲をかつぎ、犬をつれて、なだらかなキャツキル連山に入る。途中で、古風なオランダの服装をして、酒樽をかついだ男と会い、遠い雷鳴のような音をさせて九柱戯をしている一団の人びとのところへつれて行かれ、酒をふるまわれ、寝込んでしまう。目覚めて、あわてて下山しようとしたが、犬はいず、鉄砲はぼろぼろになり、体は妙にぎくしゃくしている。麓の村へ行くとだいぶ様子が変り、のちに20年が過ぎていることを知る。その変化と驚きがユーモラスに描かれていて、楽しい読物となっている。この20年の経過は、話をより面白くしている孫との出会いの点で大事である。

しかし、作者はあくまでもこの話を事実談として読者に伝えようとしている。作品中では、村の古老に、キャツキル連山では昔から不思議なものが出没し、山中の人物はこの地方を探険したヘンリック・ハドソンと乗組員たちであることを示唆させるだけでなく、この話を採集したことになっている歴史家ニッカーボッカー氏に、リップ・ヴァン・ウィンクルと直接話をしたと云わせている。さらに、作者は、『スケッチ・ブック』の冒頭で自分について、つぎのように語っている。

I was always fond of visiting new scenes and observing strange characters and manners. Even when a mere child I began my travels and made many tours of

discovery into foreign parts and unknown regions of my native city; to the frequent alarm of my parents and the emolument of the town crier. As I grew into boyhood I extended the range of my observations. My holyday afternoons were spent in rambles about the surrounding country¹⁸⁾

したがって、作者はあくまでもこれが伝説の一つとして扱われることを望んだのである。

しかし、同時に作者は否定はしているものの、ドイツの一伝説であるフレデリック赤髭皇帝とキュフホイザー山の話の類似性を認めているのである。舞台がヨーロッパに移るならば類似の話は聖者伝説として多くある。

グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話』の第二版から、「子どものための聖者伝」が加わり、その中の一つに「十二使徒」という話がある。

キリストが生まれる 300 年前、12 人の子どもを持つ母親は、どうやって子どもを養えばよいかかわからず、救世主の世に、一緒に生きられることをひたすら祈った。そして、幸運を求めて旅に出た息子は、森の中で迷い、死の寸前に天使と思われる男の子に救われ、山の洞窟に案内され、12 並んだ揺かごの 1 つに眠る。その後、つぎつぎと同様のことが起り、300 年後、目覚めて十二使徒になったという¹⁹⁾。

マックス・リュートィは、この話は口伝を元にしたものであるが、どこか古い聖者伝と似ているといって、類似の聖者伝をあげる。中世の最も名高い、ヤコブス・ア・ヴォラジネの『黄金伝説』の中には眠る 7 人の聖者の話があるという²⁰⁾。

ローマ皇帝デシウスの時代に、皇帝の迫害を逃れた 7 人の若者が、洞窟に身を隠した。神は 7 人を眠らせ、372 年過ぎて、異教がはやり、死者の復活を信じなくなったとき、この 7 人を生き返らせ、人びとに示した。そして、再び眠りにつき、神の御心のままに死んだという。

372 年という数字はもっともらしさを示すためのものであり、さらにヴォラジネは時代考証をして、聖者がよみがえったのは A.D. 448 年だが、デシウスの治世は 1 年 3 ヶ月で、A.D. 252 年のことであるから、実際は 196 年間眠っただけであると述べている。この考証も、もっともらしさを強調するためのものであることはもちろんである。

また、スイスのワリス州の伝説として、308 年眠った僧院長の話とライン地方の話で森に入った修道院長が小鳥の歌に聞きほれて帰ってみると 300 年経っていたという話を紹介し、ともに似ているが、最後に神をたたえて死んだ後者はいっそう聖者伝にふさわしいという。前者は、自分が 308 年間眠っていたことを知ると「音もなく倒れ、砕けて塵となった」²¹⁾ という。

これらの聖者伝は、いずれにせよ伝説であり、神の奇蹟を示して、人びとの信仰を増すことにその本質がある。少なくとも、この世で起りそうもないことを示すことによって、人びとを驚ろかすことを目的としているものである。

ところで、ヨーロッパには、眠ることによる年月の経過を語る物語として、「眠れる森の美女」もしくは、「いばら姫」の話がある。グリム兄弟の昔話の50番にある話はつぎのようなものである²²⁾。

ほしいと願っていた姫の誕生に喜んだ王は祝宴を張ったが、金の皿が12枚しかなかったので、12人のうらない女しか招かなかった。それに腹を立てた13人目のうらない女は、その姫が15才の時つむによって死ぬと予言した。しかし、12番目のうらない女が、それを100年の眠りに変えた。そして、その予言は実現し、城は100年の眠りに入り、いばらで囲まれる。そして、丁度100年目に、ある王子が来ると、いばらは自然に二つに別れて道ができ、二人はめぐり合い、結ばれる。

ペローにも、「眠れる森の美女」の名で、多少の差違はあるが、同質の話がある。この種の話は、聖者伝が奇蹟として驚異を与え、感化することを目的としているのと違って、子供が大人に成長する一過程の表現と考えられる。このことは、さらに「ちしゃ」²³⁾の話を並べることによって、いっそう明らかになるようである。この話の源は地中海沿岸諸国で、その類話によると、塔に閉じこめられることは、親元からの隔離独立であり、婚礼への準備の一形式と解釈される。眠りも同質の意味を持っている。アリスの昼寝も、シンデレラの汚れた姿も同じ意味を持っていると考えることもできる²⁴⁾。そう考えると、主人公はいずれも10代なかばの難しい年令にさしかかっていることがわかる。アリスの場合は7才であるが、それは作者の特別な好みでそうになっていることは、別の面から説明できるようである。それとは別に、アリスの言動から受ける印象は、7才の女の子というより、10才過ぎている印象を受けるのは否定できない。

また、いばら姫も眠れる森の美女も、100年の時の経過を受けていず、100年過ぎても何ら肉体的老化現象を示していない。いわば時を超越しているのである。そして、いろいろな不思議なことは、何も特殊な驚ろくべきものとしては扱われず、至極当然のこととして受け入れられている。また、もっともらしさをつくろうこじつけは何もされていず、「昔」ではじまる、文字どおりの昔話なのである。

こうしたことを考えると、リップ・ヴァン・ウィンクルの話は、聖者伝の類に近いものといえる。

グリム兄弟の昔話集には、他に2つの他界淹留談がある。一つは39番「こびと」の第2話²⁵⁾で、こびとに名付親を頼まれた女中が3日間山中の洞窟で楽しく過して帰ると7年過ぎていたという話。ここには時の移り変りが感じられない。もう一つは193番の「たいこたたき」²⁶⁾で、白い麻布を拾ったことからガラスの山にとじこめられている姫の存在を知り、苦難の末助ける。しかし、両親のはおにキスをしてはならないという禁忌を犯して姫の存在を忘れてしまい、その後、姫の苦勞によって記憶をとりもどし、めでたく結婚する話である。このたいこたたきがガラスの山で過した3日間が実は3年であったというもの

で、ここでは、親が見分けがつかないほどの変化が息子にある。これはもちろん昔話の形であるが、いくつかの話が合成されていると考えられるので、そうした折に合理化され、3年の時の経過とともに、変化の様子がつけ加えられたものであろう。

注

- 1) 川端柳太郎著『小説と時間』（東京：朝日新聞社，1978）p.10
- 2) 大林太良編『世界の神話』（東京：日本放送協会，1976）
- 3) P. フィリップソン著，廣川・川村訳『ギリシャ神話の時間論』（東京：東海大学出版会，1979）
- 4) *The Holy Bible* (New York: American Bible Society, 1816) p. 1
- 5) *Ibid.*, p.1
- 6) *Ibid.*, p.3
- 7) *Ibid.*, p.7
- 8) *Ibid.*, p.224
- 9) 上田正昭著『日本神話』（東京：岩波書店，1975）p.101
- 10) 『世界の神話』 *op. cit.* p.23
- 11) *Ibid.*, p.89
- 12) *Ibid.*, p.188
- 13) *Ibid.*, p.192
- 14) *Ibid.*, p.203
- 15) *Ibid.*, pp.218～219
- 16) 定方晟著『須弥山と極楽』（東京：講談社，1973）pp.98～99
- 17) 水野祐著『古代社会と浦島伝説』（東京：雄山閣，1975）
- 18) W. Irving, *The Sketch Book* (Boston; Twayne Publishers, 1978) p.8
- 19) 高橋訳『グリム童話集Ⅲ』（東京：小学館，1977）p.459
- 20) マックス・リュートィ著，野村訳『昔話の本質』（東京：福音館書店，1974）p.37
- 21) *Ibid.*, p.45
- 22) 『グリム童話集Ⅰ』 *op. cit.* p.399
- 23) *Ibid.*, pp. 117～124
- 24) 種村季弘「眠れる少女の夢」（『ベロー・狼とガラスの靴幻想』）（東京：新書館，1981）pp.49～55
- 25) 『グリム童話集Ⅰ』 *op. cit.* pp.334～331
- 26) 『グリム童話集Ⅲ』 *op. cit.* pp.400～416